



Data

監督・脚本：水谷豊

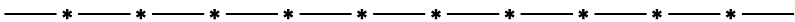
出演：中山麻聖／石田法嗣／小林涼子／毎熊克哉／水谷豊／檀ふみ／岸部一徳／黄川田将成／原康義／堀田眞三／さな／NON／太田彩乃／美智子／HIDEBOU／山中崇史

👁️👁️ みどころ

かつての業務上過失致死傷罪は、今は自動車運転処罰法違反の過失致死罪に改められ重罰化が進んだが、悪質性は昔も今も同じだ。そんな昨今、人身事故を起こしたエリート社員が、「目撃者はいない！」との同乗者の“悪魔のささやき”に乗って逃走したりするの・・・？

そんな設定の水谷脚本には違和感があるが、本作のホントのテーマは男同士の嫉妬。すると、ひょっとしてあの事故は仕組まれたもの？そんな疑いすら浮上してくる本作後半のミステリー性はそれなりの水準だが、アレれと思う点もいろいろと・・・。

後味の悪さは残るが、男の嫉妬を理解、分析するには格好の素材かも・・・？



■□■一人三役だが、脚本の出来は？とりわけ、その冒頭は？■□■

水谷豊が、轢き逃げされた女性の父親という重要な役どころと監督の他、脚本も書いた本作の脚本の出来は如何に？大手ゼネコン城島建設の若手エリート社員、宗方秀一（中山麻聖）と大学時代の同級生で大の親友でありながら、常に宗方の提灯持ちの役割を果たしていた森田輝（石田法嗣）は、本作冒頭、突然の人身事故を！いくら急いでいても、こりやほぼ100%運転していた宗方の過失だ。

これは結婚式の打ち合わせに急いでいた最中の事故だが、「急いでいたので・・・」が弁解にならないのは当たり前。事故った以上はすべての予定をキャンセルして、病院と警察に電話を・・・。それが当然の義務だということは2人もわかっていたが、茫然自失状態になっている運転席の宗方に代わって助手席の森田が窓越しに周りを見渡すと、日曜日

の午前10時過ぎの今は人気がない。これなら、目撃者は誰もいないはず。森田が思わずそんな「悪魔のささやき」を宗方に告げると、宗方の右手がドアにかかるとはならず、左手がギアに。そして、少し車をバックさせてアクセルを踏むと、宗方の前に横たわっている被害者の身体は避けたものの、被害者の左手を轢いたまま現場を離脱！これは、かつての業務上過失致死傷罪、現在の自動車運転処罰法違反の過失致死罪のみならず、明らかに救護義務違反の悪質犯罪だが、森田の「悪魔のささやき」があったとはいえ、エリート社員の宗方が今ドキこんなバカなことをするのか？まずは、そんな点で冒頭の水谷脚本に少し疑問が・・・。

■□■この結婚のプレッシャーは如何に！■□■

今なおテレビのBS11では、森繁久弥や小林桂樹、三木のり平らが登場する、東宝の「社長シリーズ」が放映されているが、そこでは、「社長派」と「専務派」の対立が面白い。政治の世界でも、企業の世界でも、派閥が生まれるのは世の常だ。しかして、宗方が森田と共に入社した大手ゼネコンでも、副社長派と専務派の対立があったが、副社長の娘、白河早苗（小林涼子）をゲットした宗方が、出世コースに乗ったことは間違いない。しかし、そのことは同時に、早苗に恋心を持ちながら自分の部下である宗方に早苗を奪われたと考えている専務派の上司である倉持課長（黄川田将成）の公私混同も甚だしい嫉妬を生むことに。

副社長から「私のかわいい一人娘をよろしく」と言われ、「しばらく東京支社に移動し、本社に帰ってきたら幹部に！」と言われた宗方はすんなりそれを受け入れて喜んでしたが、彼のプレッシャーは如何ばかり・・・？

■□■轢き逃げ直後の結婚式をどんな顔で？どんな態度で？■□■

そんな宗方の結婚式の司会を務めるのは、宗方の提灯持ちの役割で十分満足しているらしい森田だ。あの交通事故は結婚式の打ち合わせに駆けつける日の出来事だったが、あの日森田が予定の時間に遅れたのは一体なぜ？そのため、宗方は15分間の遅刻を取り戻すべく無理な運転をせざるを得なくなったわけだが、逆に言えば、もし森田が時間通りにやってきていれば・・・。もちろん、森田の親友である宗方はそのことを一言も責めなかったが、あの「轢き逃げ事件」の数日後の今、新郎と司会者として結婚式に臨んでいる2人は一体どんな顔で？どんな態度で？水谷豊の脚本はそれを丁寧に描いているので、それに注目！

率直に「恐いよ」というのが2人の本音であることはよくわかる。しかし、森田は宗方に対してそれを何度も繰り返し言えばいいだけだが、早苗とのデートを重ねながら結婚式の打ち合わせを進めていかなければならない宗方のプレッシャーは相当なものだ。ホテルでの結婚式は近時かなり派手になっているが、副社長の娘を迎えた宗方の結婚式の豪華さ

は相当なもの。もちろん、ここでは新郎新婦の結婚を祝福するメッセージが相次ぎ、森田の司会もお見事なものだったが、祝電の中にはケッタイな一通も……。もともと、司会の森田が読み上げたため、その不自然さが際立ってしまったもので、司会者が事前に自ら目を通しておけば読み上げずにすんだはず。すると、これは司会者森田のチョンボ……？

そんなちょっとしたハプニングはあったものの、宗方にとって大切な結婚式の日は何とか形の上だけは最高の日として終えることができたが……。

■□■ベテランと若手コンビの刑事の活躍は？■□■

松本清張の原作を野村芳太郎監督が橋本忍の脚本で映画化した『砂の器』（74年）は、邦画では私が漸トツのベスト1に挙げる作品（『シネマ43』343頁）。そこでは、丹波哲郎扮するベテラン刑事今西と、森田健作扮する若手刑事吉村が、今をときめく若手音楽家、和賀英良の逮捕に向けて涙ぐましい努力を続けていた。それと同じように、本作は岸部一徳扮するベテラン刑事、柳公三郎と毎熊克哉扮する若手刑事、前田俊が早い段階で登場し、新婚旅行中の宗方に対して任意同行を求めたから、轢き逃げ事件の解決は早そうだ。

これは、監視カメラの分析によって宗方の車が割り出されたためだが、そりゃそうだろう。昭和の時代ならともかく、平成が終わる時代では、日本はどこもかしこも監視カメラだらけだから、轢き逃げ犯なんてすぐに割り出せるはずだ。もちろん、この轢き逃げの主犯は宗方でそれなりの重罪は免れないが、森田は教唆ないし幫助だから処罰は軽いはずだ。

もちろん、被害者の父親、時山光央（水谷豊）、母親時山千鶴子（壇ふみ）の悲しみは重い。刑事事件としてはこれにて一件落着、のはず。ところが、そこで柳が疑問をもったのは、遺品の中に被害者・望（さな）のケータイがなかったこと。今時ケータイを持っていない若い娘などいるはずがないから、これを母親に伝え、母親が娘の部屋を調べてみたが、ケータイはなかった。他方、娘の死亡後、光央は刑事のように、娘が働いていた美容館や通っていたダンススクールに娘の様子を聞き回っていたが、それは一体なぜ？その結果、望はある合コンに参加していたという意外な情報を入手ことに……。これによって、本作は轢き逃げ事件から大きく外れ、ミステリーじみた展開になっていくが、そんな新たな局面での新旧2人の刑事の活躍は如何に？

■□■やっぱりこいつは変だった！男の嫉妬心は？■□■

私は近時、中国語の勉強を兼ねて、テレビで放映されている「麗王別姫」、「麗姫と始皇帝」、「花と將軍」、「ミーユエ」という4種類の華流（中国）の戦国宮廷ドラマを録画して観ているが、そこでは男同士の権力闘争と女同士の嫉妬争いがメインテーマになっている。しかし、嫉妬心は女同士のものではなく、男同士だって当然あるものだ。男同士の場合、それが権力闘争の殺し合いの形で表に出ることが多く、裏でこそこそと嫉妬心をうごめか

せるというケースが少ないだけだ。しかし、本作における宗方と森田の関係（親友ぶり）を見ていると、導入部からその“ゆがみ”がよくわかる。ここまで媚びへつらわなくてもいいのでは？そう思うのは当然だし、結婚式の前日に男同士で遊園地へ行き、子供のようにはしゃぎ回って遊ぶ風景も少し異様だ。すると、ひょっとして森田は一方では交通事故を起こして轢き逃げ犯になってしまった宗方に同情しているものの、他方では落ち込む宗方を見て、心の中で「ざまあみろ」と快哉を叫び、さらに痛めつけてやろうと思っているのかも・・・？

なるほど、そう考えると森田に送られてきたという脅迫状も、ひょっとして森田の自作自演？そこらあたりまでは想定範囲内だが、水谷脚本はそんな男の嫉妬心をテーマとして、私の想定をはるかに超える後半の物語を用意しているので、それに注目！

■娘の合コンの男は？娘のケータイは？■

娘も年頃になれば、父親を離れて合コンに出かけていくのは仕方ない。しかし、光央の娘の場合、それが全く内緒にされていたから娘心はわからない。刑事のような地道な努力のおかげで、光央はやっと娘の合コン相手に連絡を取り合っていたらしい男にたどり着くことができたが、それはひょっとして・・・？娘が喫茶店の前の道路で事故に遭ったのは日曜日の午前10時だが、その日の喫茶店は休みだったから、望は喫茶店には行っていないはず。それなのに、なぜ喫茶店の前で交通事故に？それを解くカギは娘のケータイにあるはずだ。しかし、そのケータイは遺品にもなかったし、娘の部屋にもなかった。すると、ひょっとして、そのケータイは・・・？

ここまでの推理ミステリーはアガサ・クリスティ並み。しかし、スクリーン上に出てくるシーケンスは、光央がある男の家に忍び込んでケータイ探しをした結果、望のケータイを発見するというものだから、そりゃ如何なもの・・・？さらに、光央は家のドアのガラスを割って侵入していたため、家に戻ってきた男が光央を見つけ出すと、格闘になっていくから、この展開も如何なもの。これを見ると、水谷豊は「相棒」シリーズの俳優としては優秀でも、監督として、さらに脚本家としてはイマイチ・・・？そう思わざるをえない。

それはともかく、こんな展開を見ていると、あの日の、あの交通事故も、ひょっとして森田の自作自演？もちろん、そんなことは不可能だが、順風満帆の出世コースを歩む宗方に対して、常に日陰の存在で提灯もちの役割を務めていた親友森田の嫉妬心は、如何なる形で爆発したのだろうか？そんな男の嫉妬心の醜さは本作でしっかり確認できる。そのため、「衝撃・慟哭・深遠の人間ドラマ」という本題にも納得だが、後味の悪さは・・・？

2019（令和元）年5月16日記